



中村俊定文庫
文庫 18
283



いも田氏



混々公羽二十回忌



卷之四



懐石印

又流石のぬり先師五六の老遠志を吊せり
新く小よて山崎信篤の題小句を薦む

人河内道のむりーをぬめり 日之庵

四季混雜

初冬風や又ぬるるも草阿は 方雲

灯火小吉辛を能くし初日乃如 方世
まふはくし初秋あーかろく叶
家はと小秋を折花の部か
子蕨乃るふ小きさせも中少う教
はる端ハあまうやー木如房
おとひ入居子日月乃屋美ふも
無神やるるハ毛ぬくた古申下
花のるや世の小武部もかろく

新巻垣清水

累のうけ清ふ小悟色一心寺
名ろく小眠ふハ死あぬ令下ろ如
ねもこころ清く
清きをわさるれ
かむまを小いましくあれ良友かあ
かつく女の影とやいそん後れ月
後生の月悲ねあー十三夜
織姫や色まふし初秋花あな

斗の脊ふきとゆい輪一途仕舞 方々
~~~~~ 酒さけあまのたそくあつ阿  
よい隣 持まや花や新師を非  
侍をいささくそやの海や海を兼  
不花と川せつ穂と川北時白く

新目

梅も古た香いね——きせぬ 北窓  
あことも月も阿ざむく病さふか

セク

道一夜二里新ね——花に葉  
梅咲ぬ妹の朝陽の師——在晴  
あつ曲ふえうあつくおん杜あ  
しく海や市ふさむいさかひ

凡後の  
きせぬく小中

きせぬくふれまおとあつあふ葉か 曇酒  
あつく海や市ふさむいさかひ

夏神子細

帯ふと白きも乃阿呈多花 栴 匠  
名といふくく者於月の一字題

懐舊四

世ふあるや時白の塵く一心寺  
阿ま小ぬわりぬふ足申り沙千が 波ニ  
あかりて橋の下行、わつさのぬ  
おくら中や物小阿ふるを世のかまう

待合中、旅、まゝ、い、ま、も、昔、あ、ら、う、ま、

懐舊

古き石をうらむ水との阿るふ

懐舊

惜り石も去りぬ不深人大井川 男谷  
大根の花や昔田とよ〜れ山  
御言や師、あ、あ、を、う、あ、り、花  
秋風ハ物、鐘、茶、乃、持、来、こ、う、申

下

書の日れおし終かろき社会相 男谷  
新書の志ろを川ハ巖の南 翁女  
うのふや園乃斬り鷄れま  
家約の報も推ろ 秋の風  
照る ちとハぬろー 子るまろ水

懐古  
先年山崎世と去りぬ後小まの花れを  
其今今又ハ流石先せし三才園年のを  
宗姓掃なるくふる花のち

雲道——時雨の中乃梅れは 序明

美中少埋をぬれもみろりか  
初給言小一ま 室さの那  
秋咲や廉道了者と立ろ南  
色えろの後其筆絵のちおきや

八十八と八十六  
ま婦をことぬさ

昔むやまがいり花とろ後 後之

播磨下じは酒磨の羽帯村おき  
之小古を改を尋しま一筋る小写し

そねろりろろろろろろろろろろろ

面ふい影のこぼれ 後れ月 後々  
山くわう移るや 波を音をり

懐念品

お流るゝ流るゝのながれを海へ  
海へくわう多幸さ持てて厚味感んぢる  
まごぶく四方より 漏り

今も若やいまもどごとく 啼きを

四季混雑

門松やまきりと知りた乃 穴中

熾同

嘗や千代のまゝ 先の音取

お師丹水先生五十暮辰小高きつ日こやう  
芽屋よ帝をとりて門流の流ともし小  
先師の恩沢を収く

日れ脚を負つて 漏る如美のたけり

善興

限あれた 價をきき乃 松老風 藁紙

上巳

々あそつていまのこぼれ 葉の隣

下  
いれりや砂まぬきける百合の花 葦幣

七夕

鶺鴒や 七夕 善哉 大目

辰やぐらと家町お淋きかんふ月

出店まゐる酒屋も多し 心の雲 暮か

艾ホユよりとぬと 安曇ふがられ法

夏の花このうらやまよむ河ま 一穂

他れをふよなれた祢とく水や夏の花 方雲

後 終日や長柄の穂活もほろり

詠通詞

かふはあは花れ通河や羊躰端

ひふゆを神の活生乃 曆の如

経原の如く 福の原も 詞り

古日えは一句いはいは 白牡丹

七夕後始

ふらうらうらうけく 紳ん天れ川



穂よきまの終日一かき  
 暖家のぬれぬしと雨ふる  
 まし福州路小物形一  
 音の日中一節又ゆれ  
 ささぬぬき物も音阿  
 人の氣をえさう極れ海を  
 まる葉や実あふし  
 ちかじかたの待静やう

世のさゆや霜の雪の海

懐古

法々々羽此と二十回と  
 傳くそのの句を傳ふ  
 終ぬと傳ふを今  
 古不易

埋とも音の壑川乃あり音 鞠久

四季混雜

掛翹や屋はと他於るの歌 莖幣

下

上

此言れ喉神小まきり ともみま州 莖帯

場五

躬恒うら八百屋へ教川わやめま  
入月や内こセ夕暮 船上り  
小舟を曳く 小濱く 炭売賣  
曙や 柔波 舟はる車

懐箱

吾身まきり今阿の神も志んが 歩迅

炭のほふふ代をかきほやふさう  
まのい早思ふさきさこの拾の舟  
日れ幸のぬりさけ石屋月足か  
池まきり道敷きり 音乃旋  
まの跡中小刺のさうも打とまは  
阿やまのふまきふさう 似は杜若  
是中

空くまら

伊の神おほふもワの後の

とこの浦よりお知るるや大門口 是中  
名の志水ぬれを惠のささるが 高文  
面ふや男山ふまゝ女命ふ  
志倒れ伴る在秋の赤山  
有仙やあゝの言跡れ女とも  
世小鬼はねくしてカ脚とまゝいれ  
傘の下も任より 神ねどり  
席二折 飛多一折うつるね

入組と海を船り 夏の柳

四季混雜

九月盡

秋もくよ洗濯とあふ入日のね 乙粟  
手おとりのり雲をたのまぬを柄が  
あゝねとらるるふこねの梅川 社笛  
まかさといふて日傘の異ささるる

このまじや花の渡月の梅をどね 社名  
非ぬやういりあを何る 雷佛

懐舊四

翁の在世は 僕幼年のあろやひあろや  
るれ考らま名は四十年小歴として推察  
たりつゝく何れは推察通りなりとのこと  
わらふあろや百人一首の中やわんあれと  
これ終をさうさうわんもや二十年の昔と  
成て今五流斎をさる懐四の記述といふ  
きやふあろやいそとふれあろやを  
鄙言をさしてすけり

十月の二字をさうあろや青か 夏岡

懐舊

いけまもも元は身よ山名の時色 庵垣

全

石小籠や乃のかりひ美あ枯柳 秋葉

全

石まもも字道の  
追後より作る

雪あろや梅れさむきおきあか 熊人

四季混雜

下野園久下右とさあ西小鷲さかり  
人のゆくと半此まほ中一よ

赤子里 謙垣如——梅乃香 如 山  
家あや中さううハ咲ぬ牡丹ふ  
名ろろや 沖新あの子ふ急ハ如——  
時あろろや 時の亭よ 跡松

懐舊

乃子富り右よ香残さうく赤時雨

去秋よりあま年小阿アとく陽陰天漏宮ハ  
社家セハ小重庭のさる事ハドも更ハ

と多防の群集流花子倍むり

梅り考ふさうさうく 非乃恵非乙編

信女の中ふ さうらういさあッ 丁か

喜柳よ 風のことせあや 吾妻琴

足勢らや如信大右乃  
神如仕月花子かうさ

神礼やふとくく 皇他り哉

不二山を詠く

孫柳よそのおさあハ山の笑ひる

美を中みよ水く老のたはむ杖 睦久  
山姥も呼尋ぬらんかともき次  
名月やとこび小径の家並ひ松  
折く小徑女を又るや初時子

懐石

親吉の教も漏テ了 室の梅  
あふも阿と流転も阿う橋作 滝江  
山をらんく傳ひ乃知是木葉捨 儿旭

四季混雜

刈り進みいふも如き葉れ蕨く如 混枝  
雨をゆきかきそりあへぬ子苗か  
菊へと一や尋初ん 秋もる宿  
宝澤ハ月小磨き如宮氷く事

懐石

み流京の如く一清静流く水の流力を  
継てこ一流小洋こく東坡山谷の流初ん  
一瓢を担いそを忘を吊る

三むくーやういさ愛如き冬牡丹 梅室

上巳  
春の字らん清池の枕花鶴鶴 梅窓

杜宇

灌仏の影の露とて川流の事

を陽

妹よりやうのハ里へもたて花

四季混雑

春雨乃一節と阿く 種月 黄後

はハとの駒音高し 紙幟

淡川中 月夜白り月花

念仏を笑ひ照るを妙う如

主神中神代のまれば袖の幅 守内

る高れ惠清は咲きゆく日傘

猫刈と襦よりまきた葉山子か

時雨のふ人ハきれよの旗もも

四季混雑

春の梅東宮、張り  
春名の海海あり

春の冷やうの心より言へばの事 傘中

沈黙の響き  
むこいなる

水梨や 落ちてしきれと 空に散り 傘車

馬士川満ちる藤原小三宿しとての鐘  
響きより響く下戸の如し一盞に時を記す

美かく揺るるのこさしと 熱柳か

静く 見るるころ小原さあは

懐石

懐石の集と五流斎の  
編みなり

茶の花や 是れ之の音後むし 柳子

懐石 三章

馬士の泣き声はか所しむ時ふか 須磨

洋くと 岫るる乃れしと 五雲

万日八十 萬堂乃 神志くま 八堂

懐石

羽田を木の葉点若小ゆきし 白羽

冬世界をうきとせり牡丹ふ 蒲城



懐舊四二章

極赤ハソ花の時雨を時る月 葉風  
菊枯く香ハ疎りくく 庭の庭 園来

懐舊四五章

福、その音名ハ  
み流東の花堂小き

春梅の力やのこ終枇杷の花 李原  
手と終く、へり梅のささりかふ 鼓子  
石少やふ終斬き 神雷大明り 之泉

花とらんくをむハおあまう炭 栲柳  
こ終ち方人の時白れ阿く 蟻城

四季混雜

牛糞吟

水を蹴く葉を極むや夏に葉 真重改 霜冬

山路吟

炭よなる木とく山志く水紫の時雨  
う終くこや神日の丸れ帆く舟 貝玉

下  
美女も美女に月ハ夜れく〜めふ 且玉  
あまふしる中よ照勝の原の菊  
あはれや南隣ハひ免乃花

懐恋品

花と海にまふはがこいなき  
とハ事おのうこ

ふと〜むじ君も茶や神わ〜  
朽ぬる石は手折て又血のむ 東車  
連立〜山巡〜ちん百合も花

り〜〜さや年〜おね〜おま  
雪を〜笑ひ戻りや 磨堂  
一と楽を岩を瀬川 星のあ 亀文  
大名の船よハ遊ぬるるの如

思ふ〜ゆ〜

氣を流〜き〜き〜き〜  
世との苦忘き〜 為れ極田外

懐恋品

いづへを招小答おしそけが友松

着乃 畢旦とよひあそ

云れ葉のねもけきしあのき 雨亦

懐 後回 六章

葉てとりむうくと神時雨 う雨  
木の葉弱おそへた久し人の上 運流  
ゆる人の神なりし月の仏の如 雨圭

神の言やまゝぬ音の友とそよ 嵐角

虫の音とあしとくありの音 十雨

きむけをやそけし小結ふ初時 神帆

四季混雜

別意

雪より歌多し恨の種を夢 及風

傾城の浴衣帷ふまことか

踏む波巻や多かえのふり踏葉の酒

懐舊四

計糸の因りし如くおきん  
きりふ不流舟をきりふ

とよ度よ味の付るしし水が 及紙  
響くもししと寝切さくしし船 虎十  
納涼舟又のしししし船のちか  
塔と帆小舟をむすみや草の紋

懐舊四

年小石の定れる時よれ時雨家

四季混雑

ふとくくハ愚かさ移人何万世も 法策  
かみま小娘れ衣や 古戰場  
時雨や京ハ也したる多き 五馬  
秋の日は残照を舟へやけふ 菰瀧  
逆さ海小舟ふもゆりやきを称葉 阿水  
待おまや陸小舟片はぐ新たき

下  
新きみややふと愛も是のきめ 冬江  
夕顔や入目をこりふ乃 春 車楓  
木もよもそ屏風よとる志之種也

いさよみ

かー善く月のこめゆも朝日山 雪路  
神おれ中一ふ之ヶく梅の花 駈直

丹砂お井登せり

浪のきこく入日や 深ふ落れ穂

善くゆきふと城はく桂の南 梅州  
塩賣れ声を隠れと志之進の如  
次郎冠者之月之日花巻云 芋文

碩果翁古稀也

七十ハいまこ花柳の白ひかふ

回文

十の飛流おきまき音乃音 不二 亡人信  
山ハ善く日の裾おふふ音外 音窓

車楓北堂 雜發を収む

川入る鳴子の世にわが如くも 吾心

懐石四六章

清の凡骨をうけつぎまきま  
又流るるにさる

暎 半くゆや野河北末の冬牡丹 片文

ま徳ハ世小糸ふ冬冬からんか 梅砂

大根川 霜より 同人 任所 荷滴

深淵 信札を 白く 麦取茶 旅風

雨と降やとを小田白く柳陰 驛直

人形の死を おもひ物々

美人花とくいつまへきく水伝花 寧路

懐石四九章

経母も時雨乃二字を極札 其山

今更ハ麦蔭樹も麻くきぬ 文洲

一生を伴ふ昔より 枇杷の花 青門

雪の外積とは舟乃洞の車馬相

任の記れ  
むら—と云ふ

ま秋もいほつ時子の足れ路一葉

暖小雪之十々遠去ぬる太山

翁子枯ても居れ枝折る那花補

若ハ志海—昔城今の友多る吳川

見るやう小徳る人あり深紙子朱汲

四季混雜

自反

水上乃か—た念魚やうのろ千鹿

顔あきく又中傷る麻の志く小外沖友

北州子雪のはが—小雲外小瓢

橋の川崎飛車

蘭舟も小舟の舟のつまみし

足さるや—妻う新堀れ梅咲く如葉

下  
三十一

類聚

まねてるや言路をたを縁をくゆ 如系  
孤大ふ書を習う一花をふらぬ 芥子  
初音やいと牡丹の如化舞、  
舞舞のふゆさうふ杖もくぬ、  
水もんで急のうこうぬ異さか 梅障  
埋火や一ちうくちうく小壺、

枇杷

後門境に種をまきし一入木の  
声下りて春吟の曲をねしとて

水宿へさうつさ柳野宿の波 九糸  
孤大のふふさけくちる外、

言長雨

かろくの影も一花乃ひうらふ、

四季混雑

古歌

西の菴お内りて

来り涼し法のところもれ苔清水 浪石  
石ハ内さふ吟や冬木の山さう 小葉



虫干や冷に秋さきく 雷を磨 方晴

望月詠

玉露の交中を秋乃 空雀が 御躬

郭云

灯ハ被川糸里見久秋一初書

中秋

くはく雄の関ふ敵如き一初外

懐夜回

馬小女持守一けきるるを侍中より

まら馬もお好く 蹄や金鼓巾 潜溪

懐念品

あー夏の末ハ縁れ流の市 李亭

袂風中肉を秋く 菊乃花 再雅

懐旧 之面ハ去るは 白ハ耳よりろく

えぬ顔のり右をきく 袖の志ろ水外 信釋 従好

懐舊用 三章

一心ちの古墳とぬして

新音やきえてと白く墨の色 晚鈴  
秋もや極ふ迫た鐘の音 花羅  
えれふのあはれも向や昔の貝 岫人

四季混雜

造物者況く山乃りくくみか 丸子  
宮解や片肌鏡——峰——の松 夕か

ふふよまるとあや 冬東西 文夫  
世の愛を晴——く路ハ落る花の家 文舟  
ふるや柔れふえたる 鬼瓦 石似  
株立やのちく——星れ方く—— 乙晴  
風や星れ木の葉をききみやけ 直風  
雪の足や柳ふけの根くくぐ 真糸  
空ふくふれくやうかふや身時雨 里川

四季混雜

梅嶺や門前 鳴くならふ寺 左橋

室のそびふたひく

多きや如小岩も 職ふや 涼見州  
若くや念仏きく 如く 松の裏  
明くある 杉木くく け白ひか

懐舊句

維摩と帝掛ありて今更の  
後焉まゝ一昔風流名言と傳ふ

山高し 二十年 春 冬 木 立 菊 咲

懐舊句 五年

若くは 梨の 霜時ふさゆ 月ひく 一 棟 阿波佐治

事くは 海ふ 橋は 春 一 月 の 音 四不 南水

古くは 秋時 雨は かな 一 岩 衣 四不 茶室

今ふ 若くは 咲く 残 秋 一 冬 松 四不 青羅

葉の花 中 右の 一 鳴る 夕 陽 山 四不 契什

懐後四二章

阿波徳傳

十月小集やうらうらほよサアのこ

水路香

水路くまをそやまのけ  
そよのよまのけゆ

今ハもく、踏ふもぢりた 拓登のね 月陰

四季の混雜

冬風の中おハぬこととをまよのこ 阿波徳傳 如洞

きよの月森はほそし 森ぬ馬の南 阿波 所女

とねハこや飛て又おろくうまの中 阿波 龍舟

いさくく清業ハ所を月見ハ 阿波 水壽

山姥ハ中おちと家の興ハ正也 阿波 古牛

廣の子れハさくさく先ハ下也 阿波 一仙

石龜乃ハはよきよ 蓮ハ花 阿波 之有

サガサガ

白雲ハ水とひけ水 阿波 井野

四季の混雜

古もや同ハ花ぬ花と花盛 阿波 馬車

さきと傘れりゆくも臺——時多 落車  
神秋の魂を足踏一尾ふりぬ  
帆舟や炊きしあへぬふ船の雪

懐後四 甲申

隙紗やむく——と今れ木のそよ駒 懐後乙辰 古道

よりやよりしぬは夕暮のこい  
海世のしほしぬは夕暮のこい

夕暮や馬を白象法乃馬 同乙 桃園

今おろよみ花はえぬ世乃冬極 同乙 梵雄  
古き名を丸めく雪れ佛外 同乙 楚得

懐後四 乙未

まらうり階りく富士の行あまよふ  
吾まを悔のうめくまらぬもや

神雪小麓むく富士乃時うら 懐後乙未 桃源

あふおのさくの橋手小大坂も大坂を甲子  
経てとつへおをををををををををを

高の中き作ハ言——冬の日 同乙 松塘  
法の樹れ咲も陽もぬ小言ハ 同は田浦 吟龍

折舟くて善ふ多をす世や 曰不 不唐  
捧とれたるるをか切き冬牡丹 曰不 文角  
口切や子白こはをむし人 曰不 漲谷  
家号や白七具一く之十二 曰不 茂根

懐舊四年

免く後日小枯燈七照や年の忌 後日津田 大溪  
傳之春の山ハ強うあ 曰不 雷の花 曰不 溪天  
書車一免くうある日や 曰不 山れ晴 李隆

在り如く一小事を法の花役り 曰不 張浦

四季混雜

二十年を  
一世といへ

あて後も音ハ世ふこくく 澄波 梅乃花 明可  
山様法界悟る氣 あつちあつちのき  
日小開き月よハは不む運か如  
くは中志賀の初ハ蕎麦の花  
ふあとおいていふれぬあやうか

下

三

忠深

花散舞花飛く花散る柳一の多 明可  
ゆくりと色ふ出ふまゝく花散る藤口内之伝  
舟を魚沼虫の反りや唇の舌  
又はふけ人福ちまのへ後乃と 湖秋  
涼一され花ちハ吹ぬ花後一と

懐古の二章

多梅れふりさるる流一 難波唱 梅照  
本橋より川

百の里梅れ名流一 難波唱 口内 梅照  
あふさく花散のきりぬ 梅 子葉 證改 蘭堂

四毛の隠疑

と何る方ふ竹葉まきを行人人ト  
花さくさか又と花散る花さるる花  
はけりさるる花さるる花さるる花  
七散く花散る花さるる花

去賣之妙也 渡るる 鱈の二つ之口 證改 平柳

思ふる日さるる花散るる花散るる花  
梅照一と謂ふもなきさるる花

四季混雜

版のき 匡老のか — 蛸の形 條石土田 大鵬

かおろ 拙ハ山きき 義とる 時雨か

之河玉八指   
 業平屏自他の本像と云く

空想中 蝶もあつむう — 男少

ハ橋も田もさういはいは   
 面敷もあ

雀四小く 今ハ平苗をく入はる

聖版   
 まうの又梅吉し

うね 版中 流りか とも 昔のど

弘小ハきき 如 運の 新あけ

九月十二夜

一面ハ花小き 川中 後のる

懐石前   
 四章

雀四小き 吐小 吹中 陽をふ

涼 — さや 末の 舞の 乃 結 田川之記 水哉

下

三十一



之昔の便り新しき瑞星也 曰示 沙岩  
去りぬるも満ちん枇杷の花庭 曰之修 浮山

懐舊旧日章

湯之弱之名吟今之世と吾人弄之筆具徳澤之所成也仍懐舊題之數言以回文

汲石ハ又隣して死後れ玉花り 淡灰市福永 春旌

石小石を好しき清き時子外 曰小後也 松牛

伊のまきくまう川 水伝花 曰可 夏竹

苔ふ深ぬる水もくくや酒く酔ゆ 曰市福永 寸松

曰三季

娘氏園り眉と伝終や 曰福良 可懐

薄きまる枝や 節々 曰福良 可懐

水清し 破小深む 曰福良 可懐

白隠し 曰福良 可懐

懐舊旧

来山翁のまを忘るるありんと又流奇を一集と  
集りたりし一子孫をまうけと共くは先哲哉  
將むこととさやあまをうろくふがわらわしと  
わされは懐舊品のひとくいとをさるね

理を水ぬるをと入りへ海や茶の極 淡灰市福永 秋葉

四季混雑

古歌

谷崎中花より産物 胡弓 松堂

卯の花中草履母乃階のり

鴨草川中ふたむすハ古子買

餅ふ中音聲ハ山名洋おひ

三真

牛小糸嫁入を足さう山さう 日西 松貫

佐胡

経巻やおとむえせハ九月画

四季混雑

朽けぬく花折るくハ山家ハ 子周

紀州本元

美さくハれもくハ 葎の窓

糸刈巻籠員ハ む乃秋

葉と巻小雷も色まめ如様ハ

下  
三三  
水鏡小端のくちやさくく川子因  
夕顔乃宮ハ花小似娘音うふ

卯月二日  
かきまはる  
うら

く川きよハ一日夕くを都一云  
涼一さや山の流新く音漱母  
雲小入音き替を不二の山  
五雲より華ぬくや雷子穴  
脊中よりけけお孫よ小雲か

やーを福くをく人よ

去年より一歩小きりて山くは  
満月中姉松風もおきよらハ  
具風

懐舊の四章

名山の山原のくおきう今や三十回忌あり  
五箇斎の若子後まむのそりしん

併乃世小かやくやまぬ茶  
世小好る中神よ時百の事深  
君折中古人の年乃物伊  
紀州陽岸  
南水  
白年齋  
白陽岸  
紫家泉

おぼろき名ハ阿ノ川ノ水ヲ主ノ水の後日下 虎文

懐石の三年

予はかみ先師の對談を以て  
又通の昔を以て懐石の一年

清女句の雪は是や一年因紀元日下 南苑

師經子

まを考ふとあはれ

紫やうふハ又けきの一ノ水ノ菊日下 派派

懐石の七年

経を初る

枇杷吹や昔経乃繪賛抱日下 鞠武

冬之日あけくハ鱈の鳴き声日下 穴棠

十萬古朽ぬき春や冬みどり日下 冬之佐

去く歌や松の入口にむし日下 風枝

三日ろく小窓一さみみ時日下 五号

枯草やかうさき石唐龜むのく日下 梅笛

今更の派海一と海一と海 松唐

懐石の三年

ぬき清小唐ぬきや花の控大鏡日下 中琳

玉啓花中 大直殿の水うと 中琳  
編書あせひとのわけるる車  
むく歌中 沼むを家乃竹の雷

懐旧

志ろ水行くや 望ませのむくしと

懐旧

望ませひまうの啼る鳥のまを  
中て氣情いとおしと

冬枯や 啼く如前のみを今  
洞松

東洲 石月村

懐旧

言灯籠 夜とくまれ 仲の那  
渭北

東武

雲も 昔ふせり 清ねる明  
樊川

巨花

四季混雜

一声小一河 雜子の節さく申  
渭北

えと 橋ハ物さし 風を 懐か  
ちきうなるハ 指ささくんさくし

下

三十一

明六や袖て顔返く網代ち 渭北  
夕暮の秋ハそのハ 又月雨 日下 浮千  
水鷄より先、ぬれ木葉が  
余の叶ハ年暮くさ—— 日下 水葉居 永我  
雪計や令谷へ落く薄乃吉  
雪も春 適きそへ海や柳の花  
葉と出く風ふこころへ 雪の申  
ふるや柳小風の物由き終

さして樹よハ梅をねる古の燈分非  
若月や弓内へ ねく枝の響け終  
時ふるる 春もをがねに 酒磨の巻  
一葉つ 風小水河を流るる 春の如  
神言と笑つて 春のや富士の峰  
拾のゆ—— 春のるや 纏乃上

々々二果の女(あ) 日他のちふあううて

四季限歌

まのねや 燕のぬき戸 東武 新雲 尚籠

故屋新しよ 足ての右 女房

鶴江や七福祓乃中 僧

世のまを をかりふ 世のまを のまを

海<sub>一</sub>の  
まを まを

まを あう 西へ 日向 人氏 おろ 子 嬰子

衣被ふ 足勢くも あき

夏被ふ お 湯ふ こ 道 の

まのね は 二人の 影

懐石回二年

牡丹是も 三 乃 形 足 之 十 古 園

葉の花 は 何 か 外 の 向 か 練 戸

懐石回

草 ま 雲 の 姿 を 女 山 恵 風

四季混雜

母の中陰夜行く  
ふいふ

貝抄子 音城おとよ河下也 日不 永殺  
うくふき乃口乃 野あや何佛 日不 巽定  
盗まきし〜とちまのぬ 此物外也  
精を〜同じよ何て 此物みろか  
在广忘や經海の隣子 新〜也

四季混雜

念佛と 此曉中かんこ香 秋田淡 洞 口  
好之中 風ふ〜〜る 鞠の色  
去宵れ 價を根さ 且 庭外 日不 曉阿  
持々扇の 入あかく 且 柳の那 日不 百泉  
吹阿事乃 亦れ 且 砂や 乱き 氣  
あ玉 且 昇る 且 齡や 編乃 且 日不 其 旭  
降〜ととも 且 石ノ 且 又 且 月の 波 是 日不 橋  
和風と 絶〜 眠るや 五月也 日不 臨 泉



青も如く香もなれた花の香ささね 日西 遊糸

八朔や畔より霞や立止る 日西 菊里

霞移や松の上なる空の峰 日西 とま

五流斎主人撰集の全と松陽の又松やうき香  
おもひ月の中時をのこる香ささねとて

答人と松遊る花なくも 日西 桂山

村邊や空の路通ふ石の息、

千衣乃まゝ 瑞凍を梅の花 日西 猿牙

雪の香初は 日西 雪もく時るか、

信翁晴田

冬徳々今も霞なり 日西 暮暮秋 和入

又自由ハおりいも 日西 雲海に水 石水

桜々福水と 日西 草乃か 庭 梅魚

田れうて馬の尻追へ 後の月、

漣や鴨の 日西 鳴入 日南 望橋

桃の日や女、交る城乃坂 日西 汶水

人買も人り 日西 成るやうのる、

多梅や馬ハウウヨ 朝日新 汶水  
予も雀退し小中雀も野路の磯也 同小 洞雪  
西陣一のあふれとくたかふるふ  
麻の産 勝れ唐行 研うね  
凍ふ日乃滝のりきやき水石  
志こ海もよれるや六のと延  
うほか木の根よせり丸小板礎 同小 貫路  
子苗を 同小 今日も林代の手邊か

山里乃 杉磨や 一むえの花 同小 同小 立志  
け秋の山々 晴着乃 縁うも  
會鳴や 源山 志心も 花の中 秋田 赤松  
中え  
顔又 坊や 夕よと 弁さへ かく 種者  
花鳴や ささくろの中 冬雲の 辰 同小 芳松  
神宮や 田御み 一うた ねれ下  
懐旧  
古た 石を 結ぬ 日向 清水 氣 同小 梅宇

下

下

満る江の急や日ぬり 曇る雨日あり 雨

水の面小舟の音あふかきき

中味ぬ人乃 露や月のふれ影日あり 竹日あり 且

初午

初午や茶屋の世帯も擔ひ相日あり 東く

細涼

夏夜の人と救らん河原

秋真

秋の日や雲の凝りまろく障子

初雪

初雪や 炊く台屋を 朝煙

四季混雜

極かく野田秋の庭れあふ盤阿陽 利陳

意人の被はきくぬす干か

重陽

一篇の日記は花 ぬり 今この景 五 桃

阿陽のをよま官と編集真流乃りふ  
香のたうり小亭陰多ふことのう後こく  
思ハハ秋信まのまをを養ひきふ流交の  
むけましたも若しめ句く体ひろひ予も又

一句と紹て又濃霧の厚志と應れ

難波津や妙室の匂ふ二度の足 五 桃

四季

玉衣やそこふきひと所夕電雀 奥の仙臺 旧山

山く小出さる中の異るの形

り右るやさやこの人もりしとふ

日ハ横小燈ハ水くゆく志之無外

四季混雑

後の若月 雨あつく月尺の奥も於し  
松茸かくとばさるひぬふたりの

橋多田

松茸のひきやふよひの月持し 孤月

まよふ

庭小棹ささる月まのこよひか

懐籠

えんまきひふいにちやあゆふ

晴るていそとふはさるみぢあか 曰雨 虎杖

四季混雜

松壽戸芽原の中池田小梅一本 百隅  
うらむとや 船へ紙さむ松の産

以千

千盛や 低く 暮れ 紙 以千  
近きく 又 船へ 志 川 舟 さ くら 舟

三編 小 治 まる 小 女 舟 小 舟 舟  
信 人 い や ま 舟 舟

月川 渡 三 川 の 舟 井 舟 舟 舟

舟 舟 舟 の  
四 編 を 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
さ 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
一 日 乃 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

下

舟 舟 舟

七夕

かきくたや橋より浅き村鳥 百陽

七月十五日と詠く

月の色も船小過ぎ深き実持りか

十三夜車輪を流す

いけを後新流よたふハ川の音

一風蹄一を初は後まふか

髪ふさく後日海雲乃流の南

を

うと中や瓦ふまねる金さるる

十三夜 為河

霞も移月小名残れなまこか 日本 南亭

時雨とよけおよそく 新日乾

滝此音の堂ふ揃き 日本 南麟

板屋浅月乃志く人の中玉妻

夢咲居ハ出く新か 日本 文川

灯と消く色る堂や空路の空

風小は色りや言権の時を空

終きも長た朝陽の音聲が 日記 言片

石文の目  
何れの別名も持たぬ

夏草虫花の音や 日記 扇 柳葉

夏敵く妻戸の風はくおふが、

石文の目  
何れの別名も持たぬ

去の音や 西陣はまて妻の糸 日記 亀湯

色くぬぬ新れ着る音やんれが、

夕空や牛の喚れ 日記 糸車

懐石

加部小東  
時雨の音とおもふ

只冬の雨と音めり 日記 一人も 百陽

二十と終りの音とおもふ  
終てもおもふ音とおもふ

世小唱 日記 音や 日記 十段橋 蘭亭

遠相の廻向り 日記 音を 日記 花枝 南麟

二十と終りの音とおもふ 日記 枇杷乃系 文川

年操り 日記 や 日記 おもふ 日記 音 日記 牡丹 言片

年既老と空川の玉手は終り  
時乃とまんとそのハ亦脱くも書

内子小と今試人　　ふ乃音　　柳花  
ふく移く　　舊道とも名所　　浪の志　　龜海

懐夜四二章

初夏の空にけふ巡る旋灯  
二十一年のまゝとては

かえぬ夢海のみや　　法佃の音　　灌石  
枯草も軸の周　　何うも向程目下　　素後

懐夜四

鳴るもむく　　ま移る時　　家板坂　　觚山

懐夜四二章

かたへく　　十の之ぬさ　　枇杷甲陽の花　　輝常

二十餘六  
とませう一睡のけうは

追昔小花と咲せ　　小雲外日下　　香枝

懐夜四

むく　　外志く　　海　　湖士　　十乃　　燈　　三及松本寺



四季混雜

雪うしおけしと盛人ゆくし 都云 付丹 桃足

石月

花ハ夕日月の時白ハ今も月か

一村の雪と画方おしと初也 同前 桃風

懐舊二章

さうしーやと後風の音をうり 同前 馬純

花ハ根ふ葉やこころし幕の介 同前 兼文

懐舊四

春山林のまをふと  
糸多ふりきをほそくし

さう力二種ふおとろしー雪の梅 付丹 豊草

懐舊四

世々朽はかちるや花の春山忘 同前 固成

四季混雜

雨白いまん中影と時をうり 羨水 倭関

時よりうづろくく思ふに保り崎 中ノ塚 北枝  
村ぬを杉のへまふのく水井 新田 可悦  
後而路の子入まじくおぬま附る 次本 ト子  
花の香とまふふゆりさるたえとか 日下 一州

懐石四 四章

ぬるふは希云深一入く水糸 幸大給村 具然  
亡人乃やぬ入けるとぬ魂まのり 後後 駒角

あはらるる布門道見のま作とゆふま

花のま方のま極の今こやま極くし幸ま  
高きととんくたふ別記まるとく句じ

香を別く白く極乃新樹のま 後本 里ト  
まく極くやまのま茶七十万交 後後 只え

四章 四章

積かとい風のまてくる落まか 月西 里丸  
目新流ふま水の流れのぬ茶か 后村 五隣  
山と山おふ一高れしく極ま 新田村 桃虹  
まう代や花へ懐くまふひま 後本 花鏡

四季混雜

中福永小杖片くく 翠の極う如 梅史  
美かく稚小人待顔や 神あまひ  
神く行 秋をきくると 山路外  
日小疎き 亦城跡 家はくく家

懐舊句

くく小の古たと 遊みや 枯柳

旧夢

片神ハ 昼也 條の 夏うらみことり 日小 梅朔  
時音又 如 田と 片く 秋在の 長  
中く小 かやハ かく 海 連れ 飯  
肉絲ハ ながと 魂も くるん 冬 尾花

懐舊

白きこころを 花とこころ 花かた又その 花

暮の付るの里の中み信あるをたのむ  
信ありは月と云のまのりんは鳴呼先師  
海にぬき小膝をきり一雷小倉のたのむの一句  
もはや又たをのまのりんとて海にたのむとありぬ  
是とわけく回忌追の種とたりし年

よむ夜ふそく方雪をみ答のま申 其庫 其月

はるまの混然

古直山つららの丘やい  
五津川口ををりたる時ふ

筆のまねや海世乃新ちる也

瑞午

あつこふとくくそとくくく ぶきき痛

入信斎のまふ  
ゆきかぬり時

唐七ま物同よけふまきこせ 日五 種し

船おやかばく風あハ秋のそり

帆八合唐七楫そ新色蕉の那

おそくくーと兼より後のみゆふ

皆縁くおの飛いぬーさくく花

新女くはとあつた物よち月干

床板

はるの雪くおハ年ー積くくや月う事

ほくろの  
うしろとくろく

おろしと小まのふやゆはをり 日記 八章

予、手のそくハ花の昔の那 李の歸

於おや夏も過ぎ、陸の身

春のあつら  
春のあつら

まゝりくろを跡ハ秋の錦うさ

吾の目や、雲々をさるる梅れむ

まゝ人小ふとアふりもる以干サ 日記 己之

ふのまふれ種を前日たてり

ゆんをれ侍建こたけハ一筆糺

ふまこハちふりり種ハ田圃うさ

若ろくや挑燈ナリハの僧と医者

山里や梅うりさたのこふと賣

懐夜回

ほくろの凡種  
おろしのかくおろし

雨のうろをさるるはあま照る雨か 古筆 専志

四ノ

鏡ノ付ノ勢ハ如ク——海ノ肌 昔志  
有吹也 沙ノ上ノ 碧草一履

信ノ翁ノ 月夜ノ如ク

阿ノ目此影ヲ忘ル 寒涼ノ南 笑正  
時ノ如ク 袴ナキニ 坐ス 秋ノ如ク

懐古ノ 二章

名ノ人ヤ 昔年 魚水ト 濁ル 花 其ノ如ク

川ノ方小くし——昔年 神ノ宮ハ 庫路

懐古ノ

去ノ跡ヲ 問エハ 河内ヤ 今ノ如ク 泉流  
家ニ 玉抱—— 桐花 繁ク 花  
月夜ノ如ク 昔年 魚水ト 濁ル 花 其ノ如ク

二十回ト 毎ク 人信ノ如ク

海ハ 其ノ 氣 毎ク 神ノ如ク 志ノ如ク 昌巴  
難波 昔年 如ク 如ク 如ク 倭川

梅丁其まゝこのざつと初き少冬日不 玩之  
神まわ中時もま時むうー河成日不 並房  
玉おや花のまむけ乃一日不 時由 仙山

懐舊四

雲ふ世まうらうらぬ名なる昔の色日不 芦洲

丹生の山田へ入候か  
備後家へかまうて

むのまーや貞、清もれ穴二つ

むのまー日  
着途

卯のふれそくふくらの丸物の勢

懐舊四

う石斗まき廻るま中み時るの如 五摩耶山 仙

懐舊四

明くや花まきくく 扇乃花今宮 針来

後身船さ百字通くや  
二十年とく平せうふとすて

一文字のまきくぬてふえや冬ぬ紫侍 仙文

懐後回

十をとりて塚のる色むる葉かよき 丹山  
葉の花ふと十天乃白しくね日あ 不学  
花れ名もむくく日あ 嘯の枯燈か日あ 濁見  
梅と呼名小津を川や小六月日あ 泉山  
葉のふや今小葉うて初むじ日あ 桜ト  
石れ曇波ふ志く水乃葉うか日あ ト志

又ゆふハむくく日あ のきふの日あ 一水外日あ 十兄  
世ふまふははむくく日あ 枇杷のむ日あ 玉養  
朽ぬり名のききねやまねは葉日あ の香日あ 一章  
ぬり日あ のまう修庵日あ 一塚れ日あ 可申  
竹の若も白ひま日あ 一多牡丹日あ 湖秋

冬

後而く融かふ日あ 中ね名紐の車日あ 可樂

懐後回

下

五十五



世小句よきとや みづしほ 春大

月をた空ハむりの白白 栄十

翁の句や 日赤 小春 弱 顔足

信濃の意名在世ハリよもくし  
南時それ何家の流るたすを

海ハ腰くして 日赤 小春 波 魚千

懐舊四

布門翁世間少明て  
芝野の心と問の便とめく

名の葉の枯る 二重村信 積和年

昔麻足 日赤 赤 灰 ぬきく 志 永 一 芭

名小や 北田也 花 白 冬 本 家 仙 志

今よ 南田 春 八 世 三 三 え 川 若 の 積 一 壽

日多 潤 龍

岩 寺 茶 花

昔 久 高 吹 中 伽 藍 の 鼻 競 一 芭

福井村  
真龍寺小法師

三つの道 晴て涼 ー ー ー 廻おろし

從時花のころを放み阿るう遠り遠西  
申小上はさの神志を絶つるべし

時——何きは秋の花も遠くも 積翠  
冷やこころもよれ味再の都へ云 月半  
霞や末唐澤有り 煙子亭 古風

懐舊四

雨ま川紅屋や杜乃落 綿 雨夕  
梅る香や深山松と旅さく海 九尾

四季子混雜

卯の花ハ咲あハセ月や時多 等川  
二十一年の春をむくて

蝶採

六十の一はあやや 店おろし 若鈴  
あやまきる下地免ささ 蝶採

四季の混雜

梅白ふむくし 乃人仕鳴る如 盤谷

ろろ泣き返りて牛や己新 盤谷

二十景山山翁又世の能風しゆく

あきき流るゝ新や日暮空

田舎の村をを出——証教の考

三十回りの 迷懐ありて

鳥橋や新海よのりれ車弁下 樂水

懐舊

伊豫の湯は新や萬葉のきのりよ 其後日出 去山

西ふと 十萬堂の——くは 同不 嵐市

云のそあやまゝるる去懐の冬牡丹 同不 踏考

冬吟

冬法本

松小名とさ——くは 同不 徐嘯

入月れ雪定ぬや 冬牡丹 同不 百兒

冬梅やそくかつの船回 同不 栲文

新法海のとかくりしし 飯り 同不 兔翁

夜を定む枝葉ありそく後乃言 曰小浦 曰花  
空をわや年くくく 曰小 虫暖 曰小 得仙  
寺五と陰ふ夢ぬ 曰小 冬筈 曰小 蟻行  
鶺鴒中あれぬ々々乃枇杷の花 曰小 官水

懐石の

先師の政をえとて

同 秋はくこのまきや花の教 能也梅 一矢  
あは花の政香り 云 新 云

懐石の

柳照や四方ふとく 南都 のふき 只  
文意や夕浪衝 夢佛事 曰小 東下  
くちぬ名を榕ふ揃むみやま 曰小 石巻  
風老のがた 曰小 母 曰小 枇杷の花 李位  
三十子小朽ぬや 曰小 年のち 曰小 穉 穉  
同 寄 曰小 子 曰小 や 曰小 津 曰小 の 曰小 浦 曰小 風 曰小 雪 曰小 け 曰小 政 曰小 文 曰小 け

四季混雜

風靜 春世ぬ 浪ちの 蕨の 車 鶴後

さきり 返れ 朝の ちりり 金魚が

山まけり 近所 庭は 咲き 干し物

むし 云の 家より 暑く 中 梅の 衣

ま 貝の 様 ちりり けい ちりり かき

幾 端の 跡 ちりり や 合 飲の 割 小れ

風後 二 頌也

地 原 一 世 一 の ぐ ね ちりり 跡 北 ちりり

ねの ちりり

川 汐 北 波 ちりり 跡 尾 花 ちりり

途 中 の 歌

何 ちりり ちりり や ぬ き ちりり 小 栗 の 女 師 ちりり

懐 念 四

枯 草 ちりり や 雪 ちりり 小 雛 乃 名 ちりり 跡 ちりり 清 誓

和 民 歌 也

懐 念 志 後 ちりり

折 り や 宵 ちりり ちりり ちりり 乃 紐 ちりり ちりり ちりり

日 也

秋風小桃の白ひや 雑草雑日あ 胡秋

咏吟

月下研ね

下戸をききかこち教しきよのそ日法陸 兒白

重陽

手よりぬきまをくあんな業れじ

大夏穀も一川ふ黄や後の月

懐名四

蜀土とのこあまなる名の内り炭日五百井 扇的

十萬堂遠忌の一集ハ  
五流奇の原より成せざるを

河を舟り山より手向の珠の南 白く白

懐名四

冬枯ふむくしと泣き花艸日吉野 耀天

山もやまを徳くまを花の伽日あ 吟水

高きまぬそのや冬木乃庭ん日あ 可醉

尋ても世よハ清の友千を日あ 晴嵐

芳るるる危清い川こね一本日あ 花千

まの白し車空舟戸をみる日下 義石

四季混雑

牡丹と花王と考す水い

芍薬の多や日吉市 文女の 風呂揚り 兼房

風鈴れ鈴ハ隙ぬる異るさう角

臨終乃序多日二編 拂ふ香吹水 浦戸

ハナ一箱筆と聖

朝小所く年不ハエの気條や梅の杖

山ちや日下 夏多 日下 障の多 柳僕

夏神を細

うたひふう日下 白のぬさや風巾 狂風

物を見

去年の香れ蚊帳みせうじ雨より

懐舊雨

草蓐へ十つ之津乃浦糸香京都貝塚 可圭

ろくくよおひい出せよあさ水か日下 外石

志く高や松ハ佛一乃後作さ

懐石

是後の矢のきりかきく修てこころしきや  
信る者の二十回の忘ふらふ方と若母じりく  
つし船よ一句をわくる

うきうきや十あねくとを眼鏡 文水

懐石

去と一先は海へ船二十回忘進福の二集と  
又流東魚りせりあり一ウヤ予一せ  
ま教をうけともおね一みの流をくむる  
かれい布門まの侍えをうけてまこく今ま  
むしりのこととをうらうら一そのやうにあ  
懐とともおね一あはれ一うまのま  
なれともおねの白きね一しう  
子向侍おね

くまここの星あはくあも洞のね 未興

江原海津

史記太子廣傳挑本不言下自成蹊といへ  
同僚一枝の縁ふひうれく作花法とそ羽の追務の  
句と綴りぬ未嘗識其人及其子孫則是路入  
耳路人我何与且吾賊平無与而喜賊之非詐則  
諂也といひて一や因風雅の及むれいも誦も  
何れあはれと後み松まをけり一も布門子  
れりて送る

其の蹊や今も浪花り一 荑露梅 楽只

同和

四季混雜

枝川のうかそとゆわらるるを聖か 富鈴  
空ハ風巾あふちうくくのかり歌 松江

茶

同和



川猪の控編々々戸一沙ききう 松江  
入おや気のよき所 輝ぬるに  
夏衣のこれよかーハヤ 夏衣

懐舊篇

弟山翁二十回忌をうけし

此時雨又何〜〜〜 起流外 露由  
合掌も 孫もハ縁より 庭葉も 花雷

東長井氏

同前

陸女日とふり日とねり〜時由外 松江

四季混雜

同前長井氏初孫

あ〜〜あ〜とよぬや〜雨乃景 いさ女  
蝶掃や 髪ハ巾のけり 紙ニ袋  
提さぬ 汝僕ハみ〜〜友のむ 夢由  
景時り とも思 滌や 遠さ〜〜  
絵具山 赤の 食 咲 ぎん げ 花  
ひ〜〜さ 花の ち 里 戸 天 戸 ぬ け ん

題端

下

下

ころりとつゝきふまゝく桐の枝 家由

永親堂、信守ふさふ

花並願りくまゝ永親堂 花雷

夢路夕之

やどろくくまゝ長生堂信守之於

夢路夕之

去来も小舎くちねハ多事

夢路夕之

冬枯や東ちの柔屋乃板定

船中吟

漕をどつたたり梅むハく屋伊丹 蜂房

先集類のそがし小園くまうみ記

よき魚

くろ人もみくね人そ 花盛日西 亀行

夏曉

色のみ塵掃片く 杜若日西 雲脚

ころもを越ふく

雨敷ハひるまのふんくく言振え 蜂房

懐舊句

今宮小吸口も如く枇杷乃を 階溪  
多宿水と朽と冴るとかな名外 五百魚

題名月香

月於みくひ須磨もぬるも鼻の先 篁路

田孝混雜

妻ひく舟と車一のそく板外 巴田

娘妻といはは進を細と片時る 魚倉

娘の風衣之とや 殫 給 董下

初風香を吹と免よ運の上 中園

秋の風輝の葉とともみ葉外 <sup>十一</sup> 研

まげとまふ揚はむや地との庭 植沖

いんまふく

庭の石谷耳小冷——あれき 菅笠

あんのかれと云り水とあとも落葉外 耳義

懐舊詞

海くさるゝ祖父の親むあさり予を  
まうばとていふも凡流のあつていふもさう  
ん

志く海くやせし極ぬさたの父乃声 不川  
古塚く子向子勢もやあ仏を 文孤  
子向くやあそこの日さよああ 蘭江  
名のよれそあ遺つて今あああ 芝山

四季混雜

入おるあつて毎日花えく月 左言改 波東  
涼くさや堂ふごうく日傘  
花ゆるとくさうく西風く柳  
水上く木の葉れ走勢あけ  
かのくくくえ結ハ人丸極ふ 葉苗  
盲人の月雪花やかくまき  
あつてやあつてあつてあつて  
甲海波たさ南ふ年乃水ふ

花又少に利根の徳をぬくくろ 渡風  
くくく知く嘆く懐くを杜宇  
洗足の仕事がなまきりの  
雪の竹雀城弾く朝日くぬ

四季混雜

わか花をも付りば  
おかしきうを尋く

梅もみやうさひの外からそけい 北真  
世の人まを向の國地やい身城い

絵小意やそは花の名は美人竹

うはさきちの紙の  
やうよ

葉おろし一離のととの一丸森

かいか

よぬくいのくけく市一太三十四

賢七十

十から一彭祖の葉も根から角 才安

八月十五夜

名月の世の故人乃かこもか

六十九

懐舊

河由一々日少無小や寺小姓 番妻  
押花や夢と名れ木の栞 青牛

閑書

夕々秋や汐干の丘れ人干陽 素更  
白急ハ多ぬさゆ穢らさうさか 方雲  
子乙女や草りう下ハ世捨人  
七夕やま秋ふ逢秋も忍ハ穢

う〜枯やや〜川ハ汲ぬる車  
三鬼柳ハ之ぬれか〜ぬお客か  
清ふと足形もぬ〜書の菴  
何や〜まふま書花と川〜道ち辰  
あれ月と磨と盾と州の書  
年の辰の書等とや〜親世書  
後書やねぬ〜居踏袋さし  
さ〜水の寒忘れ〜水たぬ

糶又 笑花山吹や 青い子 青牛  
松の底小馴深い深し 穢年  
空流き芥す 吹や 美のむ  
まの 垂うと 取てハ雪の 楠う南

口重混難

あやや山れうしあふ新ぬ山 唐綱

昔契唯

日暮るや 秋楓醒 さいく 履  
さくしゆき 憂いさく 響虫  
晴るく名ハ月の上 ぬるまふれか  
文行や名のく涼乃 彼位居 呉棠  
七十ふの 花ハ 鳴るる 響るの 申 倚人

廬山雨夜草庵中

や情く 中ハ 山あふりく 秋の 晴る

閑然

秋風ハ 山あふりく 柳 若く ぬか

舟の内ふまをさし伊勢乃配りお侍人

四季限新

二里の換眼くま衣は極か 羨蒼

草木れ痒みかく白雨の如

天下さ新に海色とも月見え

樹小書や咲々と教く花の又

鯨の帆の幽りふちりぬ叫れ海 芥舟

又ぬる此身へハ残せばとまき

娘はや新なり入る秋の風

去る隣 笛小ハ純——松乃風

懐夜四

免らふ日や時雨ふぬきあくの神 故秋

名の花や回ふ遠くを毛時雨 一海

四季限新

入お乃待し海は舟を柳——ふ ち雲



やいさねあまさくらういさつれ日傘 ちりま

あまのいさね—さくらういさつれ日傘の南

けし—やまの池のせくせくする

あまのやまの池とあまの後の朝 北無

過家のふれ 昔のまゝ

陽陰源—弘のちくひせにれま

八朔や初学院と 兵中—蒼

なまのや梅の咲口をさ—志ま

四文字混雑

和分浦 柳の池まゆ

あまのふれまゆれ池や梅の 藤角

けし—さくらういさつれ日傘の色

くさくさ

あまのふれまゆの月のさくらういさつれ日傘

あまのふれまゆの池—さくらういさつれ日傘

去夏吟

東平へたりいさるころ去夏あり  
さうち道場土川よりとかく移る

永さ日やきくも南原に花を  
南原

新樹

あちちむく松よ道同へり根

道中吟

好く小竹の子吟も葉人うね  
去晴

四季混雜

晴午

け日誰それとの名さく花あやめ  
曾風

名目小掃ふ星の初侍うね

海の底に映るを二日れくくひか  
も雲

草ぬ免ハ口又同近く海をた

岩くけの家れけ来や一葉洗ひ

けくくや鞍向海馬はけけも

花の半をたけいあまの柳の南

四季混雜

錦糸と際深き水に映るの如く  
蟻園

並冊にてかえ

八重の葉の蒼くくろりたる乳

冬日眺を

冬枯中たりしものよき如く庵も見え

高那板も梅よりかろけりや蟻園

白玉の御ふくごけふあそこの香  
北真

新谷の意の折と改めきまなふか

二日人降御ふ

中ふ種くくまて

みふさき音蟻園のそぞろの色

十の板

如月小ままハ如く  
後乃月

え暇の如く御ふりく

先喰や雪の花がく  
胃は俗

諸ぬさけ風れ海ふく  
山さく  
方雲

ぬき揃ふくく  
ねくまると余をけ

竹より小登し強しつきの峰　　さか  
云のまもも懐きりよふらふをたふし  
隈逸ふ葉燈臺やふのろ  
わくそハ忠輝の色あう古大根  
山陰やさけよれ肉の相二葉  
りりりの路やと世の梅をう  
色り右と常小残はふきうか  
後よあはるまの下のまか

上巳  
川に眺望

桃の口や筑紫のまろし帆付糸　　臺帟  
そ所まよひもあてり右玉あう發波ち

巳午の混雑

花あるや唐小ぐどろくわくの声　　時女東  
郭へふらふの外ま月見の柳  
右目や霧旋のふたもあをぬし  
古吟や是そ鬼神の送る花

桃咲や不破の園庭もなごみかゝり  
又終  
あきの節をききあひり  
痛くうんで来末へのびる月  
えが  
まゝあつちや舞子の後小竈一  
小経さお織もまのまゝ色か  
友魚  
曇火ハ急海の園に紙燭の  
鶯もいのかもさあ人うよ乃月  
一々や二王の神小内よひ

ふ梅や花の中かろかこいその  
史に  
日若き日や籠り風乃まところ  
髪結ぬ踊子もあま三井訪  
風や新しき川のあつち川

四季混雜

北野まの菴の  
橋下小盈とわろは

野ハ着ていしきくあつたぶの店  
壘幣  
日笠や寺ハ位よれた櫛の音

第吹中ハ翔とくも新田姫  
幕中幕折枝子一折折  
花酒て斗をけりし中桃の陰  
方雲

新室賀

新室小極多懐がふも美ふ  
甚さけてぬる水りりり  
ふく之はよりけりいさし一神給

あまの歌く人小極家

笑片け葉の花むけり川まき

あんなさねと七人去る雲世あ  
七上戸余合せきりきり  
あ仙中又咲枝もあ枝とあ家  
遠月子ハ房宮夢中一市北人  
侍馬士の顔おとけりき林あ  
あ明乃なひ曉や一花乃去  
帆小娘くむ袖をさ嵐のそよたう家  
川のとああともくういこようひまで

その名

雲の戸小志くくく種くく行世界 方志

種録へりくふく種録

又ぬ雲小衣をほひや 旅葛翁

ねきくろや敷く階子 雲雀雀 女媒

消入とりつハ 雲乃 今やう那

懐舊

一くちの名々をうつてく

深くさおねお形 言た名の時雨 魚巢

歳旦

享保

癸卯

鶉乃くくくを干は中 神旦 布門

甲辰

ぬ後とくく 門松志より燈川

乙巳

鶉鶉の叩くや花ふぬちんま

丙午

破魔ろやん乃奥の志取茶

丁未

社奉

任の江やいゆるんれん山

戊申

標中いんり美年表為席

己酉

標嘆吟を福きり歯取れ風

庚戌

襟正せ依保姫願乃鳥悲声

辛亥

初春風ハ花の味方や山ろく

壬子

神意うう二と海のまふ

夜二のそ柳く山や雲れ風

癸丑

侍意し雨と情心やあ戎



甲寅

窓白く松の影の音が鬼の如く

乙卯

新曆二月十日

くもが影を因ると積むと忽ち方柳

丙辰

浪花五流舟試毫

加藤川の去迄と汲りて古書外

之文  
丁巳

梅を健と門と開くやと書置

戊午

初礼子かたりて

又染くや赤らみの曙の難波橋

己未

初礼や梅の笑えは松を咲

庚申

橋や一國の錦一を神飾

辛酉

徒然草の中小ま蓮上人のつまみ  
足るまじくをよひま

関越く人々正月云々

寛保

壬戌

之まに四つあり

家舟を北へ阿多の花のま

癸亥

年の古懐りり隣乃延形

甲子

かたへ縁ハ鐘ハ音形一 美哉

延享

乙丑

まをゆき欲小限なり一 公のま

右岸田古三幸ハ北真ウ又庫より屋の  
出しくつらえぬ癸卯よりまはく  
種之れハ惟もおや一 氏所いといは推事  
日夏の吹おりの出るま左子能は

七十歳の賀

七葉やかさかたは花のいや一 その

こころのたのしみ  
御方おまきえち板のま

難波津の古里ぬく一 梅れま

あつきの梅らのまふりて

ふかひりふいり行り花の梅乃中

言所尉と燈の後小

友成小飾多々見遊ん松主婦

い所遊多々見遊ん

ぬうばるはうのへ尻北橋ふ

秋月一箇忘小

昔の字多々見遊ん

去日明神法樂

多々見遊ん一箇小節は多々見遊ん

編端乃画り

又うらや看坊寺乃河橋後

于連く早世と悼く

経原も足振ん筆見ん一期小

素年、物あつふよ  
けんと世々々々

けく席是也ハ織出一のうらや

まふおれく遊んことうわう  
人を遊のまふおれく

まふおれく遊んことうわう

八相

きつち内さばうり雀の踊りの如  
新婦や隣子あまうささき乃乳

水子一肉忌

内わろくやちや酸<sup>ハク</sup>物<sup>ツキ</sup>れ里<sup>ハ</sup>後<sup>ニ</sup>

中へ

子ハ又のお小を免う是の版  
さくく麻かりる<sup>安</sup>也<sup>ハ</sup>益<sup>ハ</sup>北<sup>ニ</sup>市

歳暮

積雪や我燐掃の船くく  
昔季作ハ杓の冬れ掃り  
招きく僧新舟やくく仕白

昔分来正月の阿

暮年乃鬼我笑りんそ<sup>ハ</sup>忘<sup>ル</sup>き

海老のりうさ<sup>ハ</sup>飯<sup>ハ</sup>

け舞も力のちとを片身<sup>ハ</sup>舞

そはまゝのや喉神くより十日軒  
那う梅やそりの意たのほいでよ

白内之ま

志方橋つるぢりやうれ境川

寅之秋吟

甲子合

限河寺の鐘の音よそいとい



りれハ舟川の氷れふり  
に草くはくぬく友節の  
ふかえハ世か一の耳  
か〜いほるは河  
流よ〜にさね居諸か  
〜人ね那〜か〜  
も具向よむかひ〜人

下  
淡きささやきと 同様の園を  
何うか知らぬあゝ人やまに  
名匂ハハ業世の友達形わ  
今ドーにハハに五流神乃  
ぬーさるにをたまひ一集  
れ催ー一陽根みき所  
く行時おこき〜に目々に

法よまふさ〜其凡枝  
に觸〜茶本茶汁生〜  
りたハ匂ことよひ〜に定ハ  
すに〜にむすし〜今初  
亦就の一帳と形わ  
何ら身

標原方如七

延享三年丙寅秋用板

彫工

六坂安堂寺町二丁目

藤倉清藏

善曉

